

---

# 無重力高校生。

メイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

無重力高校生。

### 【Nコード】

N7271W

### 【作者名】

メイ

### 【あらすじ】

女は嫌いだ。あの匂いが、目が、声が、仕草が、笑い方が、全て嫌いだ。女っていう生き物が、わたしには理解できない。話し掛けるな。わたしを見るな。

自分が女でありながら女嫌いである私、瀬村礼は高校入学を果たし、現在この教室に居る。女嫌いを公言した私の周りには、誰も近寄って来なかった。だけど彼女はそんな私に笑いかけ、手を引っ張る。彼女はあまりにも眩し過ぎた。だって私はあんな風には笑えないから。

## 毒舌パーカーフェイス

面倒だと、心の底から思った。

今日が高校の入学式だった。

制服が可愛いという理由で入った女子が沢山いるであろうこの霜村高校。

こういうものに年頃の乙女は食いつくだろう。一応年頃の乙女である私は特にそういう理由で入った訳でもない。家から距離が最短だっただけだ。だけど考え直すと入らなければ良かった、と思う。私は自分が女でありながら、女が嫌いだった。大嫌いだ。だから女子校ではないが女子の比率が多いこの学校は女嫌いの私にとってはもはや地獄であった。確か全校生徒約500人、男子約200人、女子約300人。しかし入ってしまったものは仕方なく、私は泣きたいような気持ちになりつつ憂鬱な、入学2日目を迎えようとしていた。

入学式の翌日だから、恐らく面倒な事が沢山あるだろう。

朝6時に起きた私は、寝巻きのまま味噌汁と卵焼きと御飯をもそもそとつついて、その後には弁当を作った。中学校までは給食があったからよかったものの、高校は違った。食堂はあるらしいけど、それじゃ金がなくなる。でもまあ学食も興味はあるんで、気が向いたら行ってみよう。

中学校とは違うセーラー服に袖を通す。襟の部分が紺色のギンガムチェックになってるこの制服は、何故かスカートの色は自由である。入学説明会で販売してたけど、実に何種類もあって煩わしかった。ピンクだの黄色だの緑だの赤だの。私は青にしたけど。

テレビを付けると、12星座の占いが流れていた。牡牛座が

1位。今日の運勢は総合的に絶好調でいい事があるかも、ラックアイテムはヘアアクセサリー、色が白であればグッドでピンクなら恋愛運が何たらかんたら。

ざけんな、占いなんて当たりやしない。私の腰まで伸びた真っ直ぐな黒髪は、何年も前から放置状態で伸ばし放題である。長さも揃ってない所があるし、段が入っていたところも何だかびっこになっている。前髪だけはちゃんと切っているが。そんな髪に今更アクセサリーだとか煩わしい。

特に見る必要もなく私はテレビをぶつんと消した。この場所から音が失われる。静まり返った自宅の中は、いつも通りでもう慣れた。独り暮らしって大体こんなもんだろう。

私の母親も父親も仕事だから何処だか、何たら地方の方にいる。中学生の頃からだからもう慣れた。自由だし、特に母親が居ないのは嬉しい。家事だつて得意だし。ここはマンションだから家賃もかかるけど、月1回10万の仕送りがある。結構厳しいけど、それなりにやりくりしてる。

扉を開けて、私は最寄りのバス停まで歩き始めた。  
やなこつたが、今日からマジで高校生活が始まってしまふ訳だ。

……始まんなくてもいいんだけど

「あつ、レイー！ おはよっ！」  
どうやったら朝からこんな高い声出せるんだろつな。

バス停までの道のりを歩いていたら途中、前方からやってきた奴がいた。

同じセーラー服に淡いピンクのスカーフ。全体的に癖のある少し茶色の髪は、横で1本に束ねられている。明るい笑顔でこつちに手を振って来る。

中学校からの親友である、相原梨華だった。はてさて、何故家の方向が違うこいつが私とほぼ同じ道を歩いているのか。私は取り敢えず彼女に近づく。

「梨華、あんた引っ越してないよな？」

「ん？ 引っ越してないよ？」

「じゃどうしてこんなとこ歩いてんの、まさかとうとう平和ボケ？ 独特の冷静な低い声で私が言うと、梨華の甘くて高い女の子っぽい声がそれを掻き消した。

「ちーがうってばあ！ あたし昨日まで従姉妹の家に泊ってたから。そこから登校してただけー」

「登校初日から何してんのあんた」

まともにつき合って来た友人と言えば、指折り数える位しか居ない。だけど梨華はその中でも1番大事な親友だった。クラスは勿論離れたから、殆ど話す事は無くなってしまっただろうが、同じ高校に行けただけでもまだ幸いだ。

そのままバスに乗り、”霜村高校前”で降りる。2組である私と6組である梨華は勿論下駄箱から別れ、私は1人知らない教室へと向かった。私の席は運がいい事に、窓際で1番後ろであった。この高校は丘の上にあり、窓からの景色がいい。ましてや1年生は教室が4階なのだから、私は心の中でガッツポーズをした。鬱になりそうな高校生活も、ここだけは気に入った。

オーソドックスすぎる自己紹介やら何やらが終わり。

休み時間はある程度のグループができていた。ざわつく教室の中。まあ当然と言えるかもしれないが私は独りで携帯をいじっていた。

「ねー、瀬村さんだよな？ どこ中学出身なの??」

「は??」

顔をあげると、いつの間にか座っている私の机の前に女子2、3

人が立っていた。その中心に居る女子がどこの中学校なのかだとかいう意味不明な質問をしてくる。

「すっごい黒い綺麗な髪の毛、めっちゃ長かったから覚えてたのー」  
そう甘ったるい声をした女子が言う。

これでもかかって位短いスカートに、ほぼ白目が見えない不自然に長い睫毛の瞳。無駄に凝ってる派手な頭した奴らだ。こいつの頭のとっぺんにくつついてる妙なポリウレームの団子みたいな固まりは、一体何に役立つんだらう。つかどーやってつくってんの？

「どうでもいいけど」

女子を一瞥して、席を立つ。

「どいて」

教室を出て、早歩きで逃げる。

あの匂いが、目が、声が、仕草が、笑い方が、全て嫌いだ。

女っていう生き物が、わたしには理解できない。

話し掛けるな。わたしを見るな。

屋上に飛び込む。

「っはあ、はあっ……!!」

扉を背中越しに閉めて、座り込む。  
力を失くして蹲る。

女は嫌いだ。

微かに吹いた風が、わたしの長い髪を揺らした。

視界の半分以上を覆った黒髪は、わたしの思考をも覆うようだった。

## 正反対の幼馴染

あの後吐き気を催して、屋上から4階の女子便所に駆け込みそのまま吐いた。

女嫌い？ 女性不信？ 女性恐怖症？ …… 何だかは分らんが。拒否反応、条件反射。

「げほつ、うえ、かはつ……はあ、はつ、」

幼い頃から身体は丈夫ではない。吐くものを全て吐き出すと、水道で水を飲み干して廊下に直接座った。壁を背もたれにするように4階は教室より特別教室しかないようで、誰も居ない。ましてや新人生だったら尚更な。

あー、うん。吐くとかかなり体力消耗すんだよな。疲れた。

腕時計を見ると、あと10分で4時間目にあたる授業が始まるどころだった。ならあと10分はこうしていようか。息切れを整えようと深呼吸をする。ハンカチで口の周りについた水を拭う。

……いつまでもいこうしてる訳にもいかねえか。

立ち上がるとふらつとよろけたけど、体勢を持ち直して教室へ向かった。

次の時間は校則・学校設備とかの説明だった。至極どうでもいい半分寝そうになりながらなんとか1時間耐えらるともう昼。クラスメイト達は大体グループができてからその派閥ごと、机をくっつけて弁当らしい。流石に初日から食堂使う奴はいねえんだな。私も弁当だし。

「ねえ瀬村さん、あたし達と一緒に弁当食べようよ」

甘ったるい声に顔を上げる。多分この時私の顔は最高にしかめっ面だっただろう。

「はあ？」

声を掛けてきたそいつは、さっきの妙なポリウームの団子みたい

な固まりを頭のとっぺんにくっつけた奴だった。こいつ、懲りねえのかよ…

「嫌だ。ほっとけ」

「えーでもいいじゃん。どうせ1人で食べるんでしょ？」  
カチンときた。

「ああ？ じゃあ何だ、1人で飯食う寂しい奴への同情つてやつか？ んなのいらねえよ。ほっとけつたのが聞こえねえのかよ」

私が男子並みの低い声で暴言を吐く。クラス全員が私を見ていた時だ。

「あ、レイイっ！ お昼一緒に食べよ？」

びびった。

その明るい声に振り向くと、1年2組の教室の後方の入口に、弁当の包みを持って満面の笑みで手を振る女子がいた。勿論そんな奴はこの高校で1人しか居ない。

「……梨華」

今度はクラス全員が梨華を見ていた。梨華はその視線の多さにきよんとしていたが、直ぐに私に向き直るとまた明るい声で言う。

「早く！ お昼35分しかないんだよー？」

私は無言で弁当の包みを持って、梨華の方へ行った。

「どーしたの？ あたし見た瞬間に固まったりして」

「別に。何でもないよ」

「そー？ ならいいけど」

さっきの屋上に向かい、直接座って包みを広げる。梨華は膝を崩して座り、私は脚を伸ばした。フェンスの向こうには春の青い空が広がっていた。高台の学校っていいな…と漠然と思う。

「レイ顔色悪いけど、また貧血？ っていうか生理？」

その声に梨華の方を向く。彼女はピンクのハート柄の包みを敷き

ながら私を見ていた。私は青い水玉の包みを畳みつつ答える。

「違う。さつき吐いた」

「えーつまたあ？ レイちっちゃい時から弱いんだから気い付けてよね」

「努力はしてみるよ」

こいつは私の事なら大体知ってるだろう。小学校からの付き合いだともう幼馴染と言えると思う。

「レイー卵焼きちょうだいっ」

「ああ、食べたいのあったら取っていいよ」

「ありがとー！ レイ料理うまいからお弁当もおいしーよね」

「ま、ちっさい頃からやってるからな」

「ねえレイー、今度あたしの分のお弁当つくってきて」

「いいよ」

「えっ！ いいの！？」

「別に。1人分も2人分も変わんないし」

「ありがとー！！ レイ大好きっ」

「おい、くつつくな梨華」

「えへへー」

梨華が女の子っぽいピンクの箸で私の弁当箱をつつく。私は食べる気もしないので、梨華の弁当箱を見た。彼女の母親が作っているらしいその中身は、手作りで少し冷凍食品が混じっている。

「てか梨華さあ、あんたならもう6組で友達出来たでしょ？ そいつらと食わない訳？」

梨華は大きな瞳を少し開いてから、「ふふー」と笑った。何だこいつ。

「協調性皆無のレイの事だからー。どうせクラスの女のコ達敵に回したんだろーなと思ってー」

「はあ？ あんたも同情？」

「そんなんじゃないよー。それに1日目はレイと食べたかったの」「物好きね、あんたって。そんなだから私なんかの親友になっちゃ

うんだった」

「えー？ いいじゃん。あたしレイの事好きだし、だから一緒にいんだよ。ダメなの？」

こいつは真顔でこういう事を言う。

「あー、まあいいや。好きにしなよ」

「うふふ、そうですー」

梨華だけが、女って生き物の中の例外だった。

## 帰り道での遭遇

お昼も終わって午後となる。さすがに初っ端から5時間目は無いように、すぐ下校となった。…だったら昼食持参じゃなかったっていいのに。

ざわめきが消えない下駄箱で、独り靴を履き替え外へ出ようとしたら、スカートのポケットの中に押し込めていた携帯電話は控えめに鳴った。梨華からメールだった。

《今日は1日おつかれ》

これから6組の子とかとカラオケ行くんだけど  
レイも行かない??》

こいつは私の性格を分かった上でこういう事を言ってるのか。思わず溜め息が零れるが、何せ梨華は天然である。いちいち腹を立てたらキリがないので冷静に対応しておくとしよう。

《遠慮しとく。あんたは楽しんでこい》

それだけ送って、携帯電話を鞆の中に仕舞うと新入生の群れの中を進んだ。

女子って、いや男子もか。話しながら歩いてる奴らって、随分歩くのが遅いと思う。

私の場合は普通であるつもりだが、無意識に早足なんだろう。気付けば周りは誰もいない。このままさっさと行って帰ろうか。今日は買物がある。

最寄りのバス停で足を止める。

すると、だ。

「…おいつ!!」

物凄い力だった気がする。肩を掴まれた。

「っ!!?」

正直に驚いた。首だけで振り返ると、微かに人影。何っ―怪力だこの野郎…

「…っ、痛い、」

思わず顔を歪める。そいつはぱっと手を離れた。

「あ、すまねえ…!!」

肩をさすりつつ、振り返る。鞆を持って霜村高校の制服を着た男子生徒が、息を切らしてそこに居た。髪は染めてないと思うけど、茶髪だ。結構伸びてる。ボタンは第二まで開いてるし、ネクタイも緩い。ブレザーもボタン閉めてないし、制服をきちんと着てない所を見ると真面目な奴ではないらしい。中々整った顔立ちだけれど、眼力が鋭い。そもそもって何より、身長がでかい。150ちよつとの私より30cm近く差があるんじゃないだろうか。体格のいい野郎だ。

で、何でその不良怪力男子生徒(仮)が。私に何の用か。

「……何か、用?」

「っ、はあ、くそ…。テメ、歩くのクソ速えんだよ…。やっと追い越したってのに、その、言い方あねえだろうが…」

質問の答えになってない。てかこいつ、ずっと追いかけてたのか。そもそもってこんな息切れしてると。そいつが息を整えるまで、私は無言でそいつを凝視していた。こいつ誰だろ、見覚えはない。

「……お前、瀬村だろ? 瀬村礼。1年2組の」

「違っつて言ったら?」

「違っつて言ったら?」

じゃあ確認すんなよな。

「はいはい、瀬村礼ですけど。で? 私に何か用?」

男子生徒は自分の鞆の中から、今日の4時間目に配布された数枚

のプリントを出して私の目の前に突き出した。確か入学後に色々書きまなきやいけない面倒なやつだ。

「これ、忘れてったぜ。担任が俺に届けるとかほざきやがった」  
御苦労なこった。私はそれを受け取ると鞆の中に仕舞う。

「そうか、ありがとう」

そう言った瞬間に、男子生徒の目が大きく見開いた。驚いてる顔だ。

どうしたのか　と聞こうとしたら、バスが来た。バッドタイミング。

「じゃ、私このバスで帰るから。あんたも帰れ」

「……俺もこれで帰るだけだ」

「はあ？」

「だってお前北守中出身だろ？　俺はその隣の杵嶋中なんだよ」

「あんたの出身校なんて知るか」

「うっせえ」

言い争ってもバスの乗客と運転手に迷惑なだけなので、仕方なしに私と男子生徒は2人でバスに乗る。意外にも今日が入学式の高校が多かったようで、車内は新入生でこった返っていた。私も男子生徒も吊革に掴まった。

バスが発車する。

「……ねえ、あんたさ」

私がぼそつと呟く。

「何だよ」

「担任に言われたって事は、あんた私と同じクラス？」

「……それどころか俺、お前の隣の席なんだけど」

「マジ？　覚えてない」

「お前、瀬村だろ。俺は篠原だから、お前の左隣が俺だよ」

「篠原？　フルネームは？」

「篠原遥かめはらのしほ」

「随分と綺麗な名前ねえ」

「あつそ」

篠原遙は随分と口が悪い。私も人の事は言えない口調だけど、こいつよりはまだマシな気がした。

「にしてもお前、初日からすげーな。あの態度」

「何の事だ」

「昼に女に向かって暴言吐いたろ。物凄えしかめっ面で」

「ああ、うん。一応認める」

「無意味に女敵にすんなよ。めんどくせえぞ」

「これから3年間うざいの堪えて愛想笑いするよりマシってもんよ」

「変な奴」

「あんたもね」

高校生活1日目。

女子を敵に回して親友と昼を過ごし、不良と一緒に帰った。



昨日の昼の一件があつてか、案の定誰も私に近寄つてこなかった。その方が楽だから私としてはありがたかつた。相変わらず梨華は口出ししてきたが、聞き流しておく。

そして朝、昨日気付かなかつたので確かめてみたが、篠原遥は確かに私の左隣の席に居た。

「……おい、瀬村」

「何。篠原くん」

「この方程式つてどうやって解くの」

「あ、私理数系じゃないから。ごめん」

「ちっ、役に立たねえ奴だな」

「人の事勝手に使おうとしてんじゃないよ」

「お前、頭良さそうな顔してっけどな」

「社会だけはずっと学年1位だった」

「うつつそ!! マジ!? 俺社会20点代以上取つた事ねえよ」

馬が合うようなので、授業中もそこそこ話す仲になつてしまった。でもまあそうなると、結果的に私は霜村高校でまともに話せるのは相原梨華と篠原遥だけであり、どうも高校生活うまくいってますとも言えない訳だ。ま、自業自得だけ。

「篠原くんは何処で昼にすんの?」

「俺は購買でいい」

「そう。いつてらっしやい」

やっと昼休みが来て、私は弁当の包みを机の上で広げた。箸を出して食べ始める。自分の手料理はそんなに美味しいとは感じない。もう何年も食べてるし。クラスの奴らも弁当が多い。1年だと食堂はどうも使いづらいらしい。机をくつつけ合つて弁当を食べていた。

さっさと食い終えて買い物リスト書こ…

「わあっ、おいしー！ これ手作りだよ、誰が作ったの？」

それは繊細で、透き通っていて、純粹な。

綺麗なソプラノだった。

頭上からそんな声が出た。確かに。でも有り得なかった。こんな私に声を掛ける奴なんか居る筈なかった。でも確かに、女の子の声。

顔を上げると、同じクラスであろう女子が1人、微笑んで私の机の前に立っていた。くるくるとカールした髪は天然パーマだろう、胸辺りまで伸びていてそれを2つに束ねている。長くもない前髪を右で分け、清楚な雰囲気の子。見るところ、化粧もしてないしネイルもない。赤いスカーフだった。

私は暫くそいつの顔を凝視していた。それでも彼女はずっと微笑んでいた。

「あなたは瀬村礼さんだよ。綺麗な黒髪が背中に伸びてたから印象に残ってたの。ねっ、お弁当食べるならいいところあるの。あたしと一緒に行きっ」

そう言っつてそいつは私の手首を掴んだ。「あ！？」

ちよ、待て…と言う余裕も無かった。私は連れて行かれる前に弁当の蓋を閉めて箸を持たないといけなかった訳で。その小さな荷物をやっまとめると、私は彼女に連れて行かれた。

彼女が私を引っ張って行った先は3階の南側にある小さなテラスだった。屋上とはまた違った景色が望める所だった。

「ねー、南だからお日さま当たってあったかいでしょ」

そう言っつて彼女は自分の弁当の包みを広げる。私は包んであると言っつよりただ必死に掴んで持ってきただけに近い弁当箱その他諸々

達を抱えつつ、彼女を見ていた。

「……………あなた、誰？」

私がやつと発したのはそれだけ。テラスの綺麗な床に膝を崩して座った彼女は満面の笑みで立ったままの私を見上げ答える。

「あたし？ キシタニソノカ」

きしたにそのか？ 聞いた事がない いや当たり前か、皆新入生だもんな。

「岸辺の岸と谷底の谷で岸谷。園芸の園に草かんむりつけた蘭に香りの香で蘭香。岸谷蘭香」

「ご丁寧な説明どうもありがとう。私は帰る」

「待つて待つて！！！」

くるりと踵を返した私の腕をまた強引に掴んだ。

「せめて一緒に食べようよー！ ここまで来たんだから」

「連れてきたのはどっちだ。私は来たんじゃない」

「どっちでもいいから食べよう！」

「何で私がお前と飯を食わねばならんだ。まず私はお前の事を知らない」

「今知ったじゃん！ いいでしょっ」

「くだいなお前は！ 詭弁だそんなもん」

「詭弁でも屁理屈でもいいから一緒に食べたいの！」

……………そろそろ疲れてきた。もういい。折れる。

「知らねーよ、もう…好きにすれば？ やだ。疲れた」

「やった」

私とは裏腹に、岸谷蘭香は嬉しそうである。くそ、私が何だか馬鹿みたいじゃないか。楽しそうに何やら語りながら弁当を食べる岸谷蘭香が私にとっては奇妙であった。

「……………おい、岸谷蘭香」

「ん？ 蘭香でいいよ？」

「うるさい。で、お前は何で私をここに連れてきた」

岸谷蘭香は大きな目を丸くした。ぱちくりとさせてから、くすっ

と微笑んで答えた。「だってあたし、瀬村さんと友達になりたかったんだもん」

私はこれでもかって位に顔を歪ませた。「はあ？」

「友達になりたかったら話し掛けるでしょ？ だから呼んだんだよ」

「……あんたさ、正気？ 私が昨日女嫌い公言したの聞こえなかったの？」

「んー聞こえたけど……まあそれでも友達になりたかったしなあ」

知らんそんなもん。私はもう何と言っていていいか分からない状況に陥っていた。

「ね、それ自分で作ったの？」

彼女が私の弁当箱を除いて言った。

「……だから何なんだ」

「へえー！ すごい！ あたしあんま料理できないからすごい憧れる！ ね、それもらっていい？」

「好きにしろ……」

岸谷蘭香は私の弁当箱の中の生姜焼きをつついた。「わ、すごいおいしいー！ 瀬村さんて料理好きなの？」

「まあ、好きだけど」

「へえー！ いいなあー、あたしもやってみたい」

### 高校生活2日目。

良く分からん明るい女子にテラスに連れて行かれて弁当を一緒に食う羽目になった。

くだらない世界に嘲笑。

私に話し掛けてきた、という時点で彼女はかなりの物好きになると思うが。

一時的な気の迷いだろうと思った。時が経てば普通にそこの女子と群れ始めるだろう。私は彼女に何を言われようが大抵を無視するか適当にやり過ごしていた。

だが、彼女 岸谷蘭香は、それでも私に構う事をやめない。

「おはよう！ 瀬村さん、今日1時間目体育だよ。更衣室一緒に行こう」

教室の机で居眠りをしていると、肩を軽く叩かれてそんな声が頭上から降って来る。顔を上げると満面の笑みでそこに立っている岸谷蘭香がいた。

「……よく朝っぱらからそんな高い声出るよな」

私は朝に弱い。低血圧だし貧血でもある。

「声は朝とか関係ないんじゃないかな…ねえ、瀬村さんジャージ何処？ 早く着替えに行こうよ」

「先に行つてればいいだろ。私は後で行く」

「後じゃもう間に合わないって。一緒に行こう」

「うるせーな…」

こいつのしつこさには全世界震撼だぜ。

私は席を立つと教室の外のフックに掛けていたジャージをひったくって更衣室まで早足で向かった。すると岸谷蘭香は走ってついてきた。

「何でお前も一緒に来るんだ」

「え？ だって一緒に着替えようって言ったから」

「誰も承諾した覚えはない」

「えー、て言うか後5分で授業だって、急ごう！」

結局、私は彼女と一緒に着替える事になったし、授業でペアになった時も彼女となった。2時間目の学校説明の時間になり、席に着く事でようやく岸谷園香から解放された。彼女は私よりも前の随分離れた席にいた。チャイムと同時に隣の席に篠原くんが座った。

「物好きな女もいるんだな」

ぼそつと篠原くんが私に呟いた。

「私にいつもひつついてる娘の事？」

「他に誰が居んだよ。お前にあんな執拗に話し掛ける奴なんか居る訳ねえだろ」

「まあね。私と一緒に居て何が楽しいんだか」

「お前もそろそろ友達になれば？ あいつと」

「……冗談じゃない。女なんて信じられる訳ないでしょ」

「何でそこまでして女嫌いな訳？」

「……」

そう篠原くんに言われて私は黙る。

『……さい…めんな…さ……んなさい…めんな……ごめ…なさい…  
…ごめんなさい…』

機械的に繰り返される懺悔。

涙で顔を濡らして、蹲って謝り続ける幼い女の子が暗闇に

「別に。」

脳裏に浮かんだそれを掻き消すように、強い口調で言い切った。

「あんたも好きじゃないんですよ」

「まあな。俺の顔だけ見て寄って来るし、うっせーし。勝手に告ってきて振ってもしつけないし」

「そう。ろくなもんじゃないの、女って。だから嫌い。それだけで十二分、理由になるでしょう?」

「まー、そうだな。俺、彼女いた事あるから全否定はできねーけど」「あんたも彼女作ったりしたんだ」

「向こうから言い寄ってきたんだよ。瀬村、お前は? 彼氏いた事あんの?」

「まさか。私の事を好きだなんて言う男、脳細胞がどうにかしてると思えないけど」

「言い過ぎだつつの、ほんっとお前口悪いなあ」

「篠原くんに言われたくないけどね」

次の授業は社会だったけど、それもろくに聞かずに篠原くと適当に話していた。そして休憩時間。私は教室に居るのも億劫なので外へ出る事にした。

下駄箱を開けると、おやまたベタな。白いルーズリーフのメモが乱雑に折られて入っていた。何だこれ。ラブレターじゃあるまいし、あ。もしかして。中身に目を通す。

【昼休みに体育倉庫にひとりで来い】

「……………く、ははは。笑っちゃうねえ、どいつもこいつもさあ……………」

私はメモを片手でぐしゃぐしゃに握り潰した。

ほんと、くだらない世界だ。

## 疾走、失踪

胸糞悪い。不愉快だ。いつもの仏頂面を更にしかめながら、外へ向かった。果たし状もどきは全力で握り潰して、もう開けない位に固めた。腹が立った。セーラー服の上から羽織った長袖のセーターのポケットの中の携帯電話を取り出すと、電池残量を確認する。腕時計に目をやると、もう休み時間は終わりに近づいていた。

校門を出てすぐの自販機付近のベンチに腰掛ける。お腹、少し痛い。そろそろ生理かも…と、とにかくイラついていたが、頭上に降ってきた声には顔を上げた。

「お、礼。お前もサボリ？」

同じ中学校からの親友…なのか腐れ縁なのか、まあそこそこ仲のいい男友達といったところの野中龍一のなかりゅういちだった。適当に伸ばして適当に切っている黒髪。痩せ形で身長は平均より上くらい。

「……龍一」

「今日は一段と機嫌悪そうだなあ」

「だったら話し掛けないでくれる？ まあ、龍一だから別にいいけど」

「どっちだよ。あ、何か飲む？ おごるけど」

「ありがとう。ホットのレモンお願い」

「了解」

実際良く自販機に小銭を入れて私にホットレモンを手渡すと、自分は緑茶を買って私の隣に座った。

「緑茶って。相変わらず趣味が渋い」

「うるせーな、緑茶バカにするとシメンぞ」

「してないよ」

チャイムが鳴った。授業開始だった。

「あー、鳴っちゃった」

「別よくね？ どうせ面倒なのばっかじゃん、入学後って」

「まあねえー…龍一って、何組だっけ」

「3組だけど」

「え、嘘。隣だったの」

「お前なあ、一応さ、俺お前の友達なんですけど」

「ごつめん…いや、龍一、影薄くて」

「薄くねえよ！俺めっちゃ影濃いつすけど!？」

「うん、あんたは濃いわ。人気者だし」

「お前は別の意味で影濃いけどな」

「うるさいわねえー…」

談笑をしつつ、飲み物を飲み終えた頃に龍一が唐突に立ち上がった私の目の前に立った。

「…なに、」

龍一は人懐っこいいつもの笑顔で、へへ、と笑った。

「学校抜け出してどっか行こーぜ」

私は目を丸くした。「…は？」

「いーから行くぞ！ほら、立っていつ」

「うあ、ちよ、ま、龍一っ…!」

私の手首を強引に掴むと、彼は私をリードして走り始めた。

何も考えてない、空っぽの頭の中で漠然と考えた。

何もかも唐突に始まるものだな、と。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7271w/>

---

無重力高校生。

2011年12月23日00時51分発行